

「ライフキャリア」「社会軸」に厚みを

キャリア教育を牽引してきたお二人が考える、これからのキャリア教育のあるべき姿はどのようなものでしょうか？
P8～11の対談に引き続き、高校現場へのメッセージをいただきました。

取材：文／堀水潤一 撮影／平山諭



ライフキャリアについても 手厚い指導・支援を

— 先ほどの10年間のふり返りを踏まえ、これからのキャリア教育はどうあるべきだとお考えですか？

児美川▼キャリア教育本来の姿が主流になっていくことが理想です。すなわち、前半の対談の裏返しですが、「ワークキャリア」だけではなく「ライフキャリア」についても手当てを厚くし、「自分軸」だけではなく「社会軸」についても関心をもたせ、さらに、「学び」の領域も取り込みながら、学校全体で、将来必要となる力を育むことです。キャリア教育として取り立てて指導していたものを、日常のカリキュラムに埋め戻していけば、生徒の力も自然とつくし、先生方の負担感も少なくなるはずです。

藤田▼ライフキャリアに関しては、子どもたちは将来、職業人単体とし

て生きるわけではありません。一市民であり、恋をする男女であり、家族の一員にもなるわけです。総体としての大人になるステップがあるわけで、その部分に対する指導や支援がより必要になってくるでしょう。

児美川▼やり方は学校によって違ってくるはずですね。特に高校は、学校のタイプや生徒の実態が大きく異なります。中学校と比較して、もっと個性的なキャリア教育があつて然るべきです。生徒の多様性を考えたら、日本中で同じキャリア教育を目指すほうが不自然ですよね。

「大変お化け」に 振り回されないで

藤田▼何も完璧なキャリア教育である必要はありません。準備万端整わなければ始められないなんてことはありません。それよりも手持ちのりソースでできることから始めましょう。

それによって生徒の成長を実感したら次へ進む。そんな形でいいと思います。「大変だ」と言う先生の話をよく聞くとインテンシブについての話である場合が非常に多いんです。それがいつの間にかキャリア教育すべてが大変だという話に変化して伝わる。実体的ない「大変お化け」に振り回されているとすれば、もったいない話ですよ。

児美川▼先生方は、例えるなら重装の鎧を着ているようなもの。鎧を脱げばもつとしなやかに身動きがとれるはずですよ。自分なりのやり方でほんの少し前に進むだけでも十分ではないでしょうか。

— 毎年やるべき取り組みは増える一方、やめる取り組みは少なく、それが負担増の原因になっているという見方もあります。

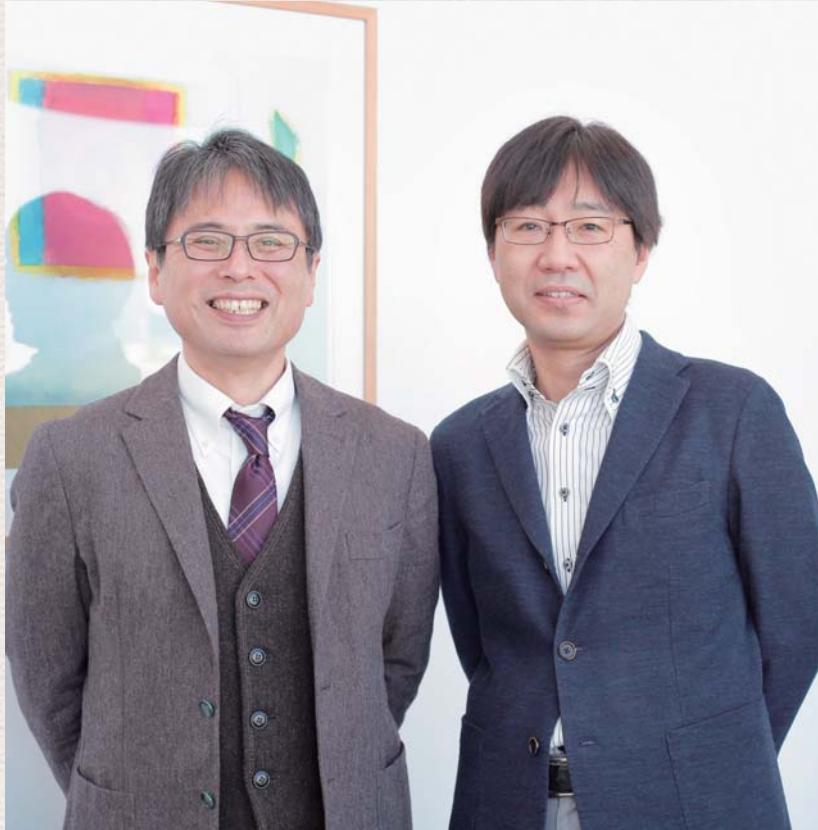
藤田▼やること自体が目的化していると、そういう状況に陥りやすくな

ります。「こういう力をつけたいね」というゴールが明確になっていけば、新しいものを取り入れる際、「それはいいね。今までの代わりになるね」という議論が起こるはずですよ。

児美川▼中学校の先生方と話していると、慣れを感じるときがあります。「ひととおりの型は作った。それを毎年繰り返していけばいい」という雰囲気があるような。

藤田▼定型化と前年踏襲は大きな課題です。前年踏襲が続くと、何のために行っているのかという目的を見失い、形骸化していきます。全体計画や年間指導計画を策定している高校は増えていますが、常に目的に立ち返り、PDCAサイクルを回していく必要があるでしょう。

児美川▼管理職にリーダーシップがあり、学校全体で取り組む姿勢がある学校ほど成果は出ていますね。



藤田晃之(筑波大学)
『キャリア教育基礎論』
実業之日本社



児美川孝一郎(法政大学)
『キャリア教育のウソ』
ちくまプリマー新書

——その際、評価をどうするかという
のも悩ましい課題です。

藤田▼これについても、「評価をしよ
う」という掛け声があまりに多いため、
やること自体が目的になっているケー
スがあります。インターンシップにし
ても、アウトプットとして「何日間行
きました」とか「参加率は何%です」
ということは出すけれど、それを通し
て生徒がどう変容したかという点が

議論として起こりづらい。

児美川▼ただ、アウトプットではなく
アウトカムでキャリア教育の効果を図
るとき的手法つてなかなか難しいです
よね。そういうことを国が指針とし
て出せないものでしょうか。

藤田▼それに関しては考え方がわか
れるんです。というのも、アウトカムと
いうのはゴール設定と表裏の関係なの
で、ゴールをどうするかという議論が

個別に必要です。それなのに国が「例
えばこういうゴールが考えられます
ね」と提示すると、校種も規模も立
地も関係なく、同じような目標になっ
てしまいかねません。そのため敢えて
出していないのですが、そのことで先

生方に負担感があるのは事実でしょ
う。また、評価をしたところで、その
妥当性や信頼性もわからないという
声も聞きます。暗中模索していると
ころなんです。個人的には、ゴールそ
のものではなく、ゴールの設定の仕方や、
生徒の成長や変容の見取り方、さら
には出てきた数値の扱い方などを提
示していくことが必要だと感じてい
ます。

児美川▼それはキャリア教育にかか
わる研究者の責任でもありますね。

自己開示が大切 自らモデルになってほしい

——最後に全国の先生方に応援メッ
セージをいただければ。

児美川▼孤独を感じることもあるか
もしれませんが、同じような思いをも
つ人は必ずいます。つながる相手は、
他校の先生かもしれないし、保護者
かもしれないし、地域の人かもしれま
せん。そうしたつながりに、勇気づけ

られることもあるでしょうし、自分が
やりたいことのイメージを広げるきっ
かけになるかもしれません。繰り返
しになりますが、重い鎧を脱げば、や
れることはたくさんあると思います。

藤田▼生徒にとって、一番身近な大人
のサンプルは、親であり先生方です。
だから大人としての生き様を示して
ほしいと思います。例えば、「息子が
中学入試で不安なんだよね」とか、
「親が今入院していて大変なんだ」な
ど、大人としての喜怒哀楽をできる
範囲で、ぜひ自己開示してください。
お子さんを授かった男の先生であれ
ば、奥さんが分娩室に入ったという連
絡を携帯電話で受け取ったときの、気
が気ではない状況を話してほしいので
す。そうすることで感じる、「大人って
子どもが入試の時はこんなに不安な
んだ」とか、「自分が生まれた時もこ
んなふうを迎えられたのかな。親にな
るってすごいことだ」といった感覚は、
きっと今後の生き方に影響するはず
です。小学生には早くても、高校生で
あれば受けとめられることはたくさ
んあります。そうした身近なところ
からキャリア教育を始めてほしいと思
います。